

田辺 元 (たなべ・はじめ) 1885~1962

哲学者 ~ 西田哲学と並び称される独自の田辺哲学の樹立者へ

出生 1885年(明治18)2月3日、東京神田猿樂町(現・千代田区)に漢学者・教育者(後に開成中学校長)田辺新之助の長男として生まれる。

履歴 東京帝国大学数学科に入学後、哲学科に転科。東京帝国大学文科大学哲学科卒業(1908)。大学院で学ぶ傍ら母校(城北中学)英語教諭として教鞭をとる。大学院退学(1912)の翌年より東北帝国大学講師。西田幾多郎の招聘で京都帝国大学文学部助教授就任(1919)。文部省在外研究員として欧留学(1922.3-1924.1)後、京大教授就任(1927~1945)。文化勲章受賞(1950)。フライブルク大名誉博士号(1957)。

事績 初期の論文・著作は自然科学の基礎論に関心を向けており、日本の科学哲学・数理哲学の草分けとなる。京大助教授(後に教授)就任、西田幾多郎と共に京都学派の第一世代を形成した。留学後、歴史や文化、社会へと考察を進める。マルクス主義等との対決を通し独自の「絶対弁証法」を構想。

その立場から「種の論理」を提唱し「田辺哲学」を確立する。第二次世界大戦末期、戦中の哲学への自己批判を込めた「懺悔道としての哲学」を唱え、宗教的、他力的哲学へと転向。時局にも敏感に反応、「政治哲学の急務」等時事論文・講演も多数ある。退官後も晩年に至るまで活発な著作活動を継続。

評価 田辺元の哲学は、独自の哲学体系を有する「田辺哲学」と称される。13の論文に渡り論じた「種の論理」のように、既に完成した思想の文章化でなく、継続的な思索の発展、修正が加えられる。変化が激しい時代に、広範な問題にわたり論じたため、立場の相違により必ずしも受容されているわけではない。唯物弁証法の立場からの批判は生前からあり、また独自の宗教哲学ゆえキリスト教的立場からの批判も生じたが、日本の代表的哲学者の1人として海外でもその哲学は注目されている。

代表作

『種の論理の弁証法』 一連の「種の論理」に関する論文の最後に、他論文とは5年の間隔を空けて唯一戦後に発表され、単行本化された論文。『懺悔道としての哲学』とも関連が深く、戦争の正当化につながった前作までの「種の論理」に対して修正を加えている。全集第7巻に収録。

『懺悔道としての哲学』 懺悔という自己否定的、宗教的概念を哲学に導入。戦時における自己の哲学者としての無力を自覚し、絶対的な他力による哲学へと転向。第二次世界大戦末期より同内容の講義を行うが、出版状況が悪く刊行が遅れ、「一億総懺悔」時代に紛れた刊行となる。全集第9巻に収録。

キーワード

私の希求するところは真実の外にはない 田辺元の記念碑(墓碑)に刻まれた章句。「生の存在学か死の弁証法か」からとられており、田辺の哲学に対する姿勢を感じさせる。

ILノート 軽井沢の自宅より徒歩10分程の場所に、作家野上弥生子が初夏から晩秋までを過ごす野上家の山荘があった。田辺元の妻千代と弥生子は親交があり、千代死去の際に弥生子は経帷子を縫った。千代の死を契機に田辺と弥生子の交際が始まったらしく、弥生子の軽井沢滞在中は互いに行き来し、在京中は文通で、執筆状況報告や近作への感想等幅広い話題を交わすという関係が田辺の死去まで続いた。

神奈川 1956年、野上弥生子が野上家所有の南林間の土地を訪れた報告の書簡に対し、軽井沢を去り東京近郊に住むことがあれば「第一の候補地」と返しているが、座間の米軍飛行場の騒音問題もあり実現しなかった。なお、弟の田辺至は洋画家である。鎌倉美術家クラブを創立し、神奈川県美術家協会創立発起人会に参加、また神奈川近代美術館運営委員を務めるなど、神奈川県とは縁が深い。

最期 1961年正月、軽井沢の自宅にて脳軟化症を発病、群馬大学病院中尾内科に入院。翌1962年(昭和37)4月29日死去。享年77歳。



Great Works 22

田邊元全集 全15巻 筑摩書房 1963~1964 <121.9 / 36>

解題 田辺元的全完成著作(講演を含む)が収録されている。未完の論文がこの他にもあるが、脱落等の問題があり割愛。また、日記・手記・書簡類は全く含まれていない。西谷啓治・下村寅太郎・唐木順三・竹内義範・大島康正(編・解説)各巻ごとに詳しい解説があり、また月報には田辺の学説や生涯・人柄に関する貴重な情報となる追想記等が掲載されている。

内容

- 1 = 初期論文集 措定判断に就て[1910年 最初の論文]実在の無限連続性[1922年 留学前最後の論文]他
- 2 最近の自然科学[岩波書店 1915年 処女作。自然科学の認識論的批判]科学概論[岩波書店 1918年]数理哲学研究[岩波書店 1925年 この書の一部を当てたとされる同タイトルの論文で1918年博士号を得る]
- 3 カントの目的論[岩波書店 1924年]ヘーゲル哲学と弁証法[岩波書店 1932年]哲学通論[岩波書店 1933年]
- 4 = 初期・中期論文集 直観知と物自体[未完。1925-1926年3回に渡って発表]西田先生の教を仰ぐ[1930年 絶対無の捉え方に対する西田哲学の批判。独自の田辺哲学への道を歩み始める]他
- 5 = 中期論文集 哲学と科学との間[岩波書店 1939年 関連論文集]正法眼蔵の哲学私観[岩波書店 1939年 宗教聖典である「正法眼蔵」を哲学として解釈]他
- 6 = 「種の論理」論文集 社会存在の論理[1934-35年3回に渡って発表。初めて「種」という概念の独自の社会的意義の重要性を指摘]種の論理の意味を明にす[1937年 「種の論理」の完成。田辺哲学を名実ともに確立した論文とも言える]他
- 7 = 「種の論理」論文集 実存哲学の限界[1938年]国家的存在の論理[1939年]永遠・歴史・行為[1940年]倫理と論理[1940年]実存概念の発展[1941年]種の論理の弁証法[秋田屋 1947年 1946年発表「種の論理の実践的構造」に補筆訂正・序文を加え単行本化したもの]
- 8 = 時事論文集 危機の哲学か哲学の危機か[未発表 1933年脱稿]政治哲学の急務[筑摩書房 1947年 1946年発表論文に加筆し同年単行本化したものの改訂版]絶対無の立場と唯物弁証法[1946年]他
- 9 懺悔道としての哲学[岩波書店 1946年 1944年、退官前最終年度にこの骨子を講義。親鸞の浄土真宗の影響を指摘されるが、本人は間接的と説明。]実存と愛と実践[筑摩書房 1947年]
- 10 キリスト教の弁証[筑摩書房 1948年 晩年の思想を示す]キリスト教とマルクシズムと日本仏教[1947年]
- 11 哲学入門[初出 同タイトルで筑摩書房から出版された4書「哲学の根本問題」1949年「補説第一 歴史哲学政治哲学」1950年「補説第二 科学哲学認識論」1950年「補説第三 宗教哲学・倫理学」1952年に加筆訂正]
- 12 = 科学哲学論文集 力学哲学試論 [1948年 - 1950年]数理の歴史主義展開[筑摩書房 1954年]理論物理学新方法論提説[筑摩書房 1955年]相対性理論の弁証法[筑摩書房 1955年]
- 13 = 後期論文集・遺稿 ヴァレリイの芸術哲学[筑摩書房 1951年]哲学と死と宗教[未完成]生の存在学か死の弁証法か[1962年]メモ Mori [1958年 田辺元の告別式に唐木順三により朗読された小論文]他
- 14 = 雑纂 上 アララギの伝統[1933年]短歌[1921年 『アララギ』に掲載された作品。この年以降短歌を発表することはなかったが、作歌は晩年まで続いていた。]他
- 15 = 雑纂 下 講演・講義[主として未発表の本人未定稿や受講者による速記録] 辞典の記述[岩波哲学辞典及び教育学辞典の執筆部分] 年譜 目録[全集収録作品目録]

参考文献 ~この人をもっと知るために~

<図書>

- 田辺元・野上弥生子往復書簡
岩波書店 2002年 586p <915.6LL / 540> 資料番号 21549969
- フィロソフィア・ヤポニカ / 中沢新一著
集英社 2001年 375p <121.6 / 164> 資料番号 21391354
- 田辺哲学とは (燈影撰書 17) / 西谷啓治ほか著
燈影舎 1991年 284p <121.6 / 119> 資料番号 20382909
- 田辺元思想と回想 / 武内義範ほか編
筑摩書房 1991年 391p <121.6 / 115> 資料番号 20338547
- 田辺哲学研究 宗教哲学の観点から / 氷見潔著
北樹出版 1990年 351p <121.6 / 104> 資料番号 20243317
- 弁証法とはどういうものか (岩波新書) / 松村一人著
岩波書店 1973年 214p <116.4 / 30a> 資料番号 21368667

<図書(部分)>

- 絶対否定は何を差異化するか / 中岡成文 (京都学派の哲学)
昭和堂 2001年 p52 - 65 <121.6KK / 166> 資料番号 21403894
- 種の論理 田辺元 / 中岡成文 (日本の哲学を学ぶ人のために)
世界思想社 1998年 p58 - 88 <121.6GG / 147> 資料番号 21043740
- 田辺哲学について / 辻村公一著 (現代日本思想大系 23 田辺元)
筑摩書房 1965年 p7 - 62 <081.6 / 26 / 23> 資料番号 10149573